

21世紀は「ごちゃまぜ」の時代(3) -地域包括ケアとごちゃまぜ②

text by Takeshi Karasawa

文 唐澤 剛

で、商社マンとして15年勤務後、1981年に何も教えない幼稚園「愛知たいよう幼稚園」を始めました。何も教えないというのは、自然と緑の中で子ども同士自由に伸び伸びと遊ばせるという意味です。

少し脱線しますが、子ども同士自由に伸び伸びと遊ぶことは、子どもの発達にとっても重要なことです。幼児の発達の目標は、一言でいえば「生きる力を身に付ける」ことです。私は、「生きる力」を身に付けるとは、「自己を主張する力」と「他者と協調する力」の両者を身に付けることだと考えています。子どもでいえば、おもちゃを独占していると友だちが離れていってしまったり、さりとて譲ってばかりでは自分の番が回ってこない。子どもは、子ども同士で伸び伸びと遊ぶ中で、この両方

の力を自然と身に付けることになり。だから、子どもは子どもたちの中で遊ばなければなりません。

次に、吉田氏は、1986年社会福祉法人「愛知たいようの杜」を設立しました(現在は理事長を退職)。通称「ゴジカラ村」です。ゴジカラ村は、長久手市内の小高い山の麓にあります。私も何度も訪れました。ゴジカラ村の理念は、できる人だけがもてはやされる「5時まで」のせわしい流れではなく、子どもやお年寄りのように自由にゆったりと過ごせる「5時から」の流れを大切にしたいというものです。

社会福祉法人愛知たいようの杜のホームページには、「私たち、愛知たいようの杜は誰もが役割と居場所のあった昔の暮らしが必要だと感じそ

前回は、私が提唱している「多様性(Diversity)×「相互作用(Interaction)」=「ごちゃまぜ」吉田・雄谷・竹林の「地域包括ケアとごちゃまぜの法則」について紹介しました。今回は、この中から愛知県長久手市長で私の親しい友人である吉田一平氏の取組みについてお話ししたいと思います。

吉田氏は、1946年生まれ

の暖かく、わずらわしい暮らしを指しました。手間がかかってわずらわしくて、不便で思い通りにならぬい。だからみんな暮らしていける。だからみんなの居場所がある。ゴジカラ村という暮らしかた」と記されています。

吉田氏は、「雑木林はいつも未完成。まざって暮らしている。少しずつみんな我慢して、譲りあっている。自然も雑木林も子どももお年寄りも、生きとし生けるものがつながって暮

らす」と述べています。私は、この「まざって暮らす」「雑木林」「役割と居場所」が、吉田さんのいう「ごちゃまぜ」の思想の中核だと考えています。

ゴジカラ村の「共生」のキーワードは、「だいたい、まあまあ、てきとう」です。ゴジカラ村には、だいたい村(小規模特養)、ほちぼち長屋(多世代共同住宅)、があります。

2018年10月18、19日に、長久手市の愛知県立大学、愛・地球博記念公園を会場として、「地域共生社会って?まざって暮らすわずらわしいまちづくり」をメインテーマに、「第1回地域共生社会推進全国サミット in ながくて」が開催されました。全国の保健・医療・福祉・まちづく



出典元:長久手市ホームページ

りなどさまざまな関係機関から約1900人が参加し、盛会となりました。私も参加しました。その時のポスターをご覧ください。「自然も雑木林も子どももお年寄りも生きとし生けるものがつながって暮らす」。ごちゃまぜと共生そのものです。

長久手市は、「市民主体のまちづくり」を提唱しています。吉田さんは、「遠まわりするほどおおせいが楽しい、うまくいかないことがあるほど、いろんな人に役割がうまれる」と述べています。



Profile

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任教授。1956年長野県安曇野市生。1980年早稲田大学政治経済学部卒業。同年厚生省に入省。2014年厚生労働省保険局長、2016年6月内閣官房まちひとと社会創生本部地方創生総括官。同年8月に退職、12月から現職。